

「ノニ」文における条件・結果の階層化と用法

家田 章子

キーワード ノニ・階層化・論理構造・必然性・程度の高まり

1. 本稿の目的

これまで「ノニ」は逆接・譲歩の表現として多くの研究がされてきた（小泉（1987）、戸村（1988）、渡辺（1995）、前田（1995）他）。本稿では、「ノニ」の逆接・譲歩以外の用法について、その論理構造を明らかにする。その用法とは、前節に含まれる関係の成立が、後節の関係の成立を必然的に含意することを示す用法で、話者の当然の気持ちを表すものである。

2. 先行研究とその問題点

「ノニ」には逆接・譲歩の用法の他に順接の用法があることについて述べた研究では、否定のスコープの問題（才田（1980））や、不適条件（（田野村（1989））で説明が試みられているが、これらの説明では、「ノニ」と「ケド」の使い分けや「ノニ」と「ノダカラ」の置き換えの可否が十分に説明できない。

また、「ノニ」文に「さらに、そのうえ」といった「追加」の意図を表す用法があることについて述べた研究に、言語学研究会・構文論グループ（1986）がある。その研究では、ある種の「ノニ」文が単に状況を表すだけではなく、「かかえてくわえて」「よわりめにたたりめ」というような意味合いがつきまといていることに触れている。そして、例文として以下の4つを挙げている。

- (1) 物価がたかいノニ、災難がひきつづいてあるので、江戸中、人心きょうきょうとしている。
- (2) 他人であっても、道雅のような間拍子のあわない相手には軽蔑を感じるノニ、その軽蔑すべきものが自分の血をうけた息子であることが、行友にはいっそうたえられないはずなのである。
- (3) それだけでもたいへんなノニ、ちかごろまた、人にもいえない苦労があ

るらしいわさです。

- (4) 八年このかた、わずらい、わずらいしていた細君がよくなったというだけでもたいしたことであるノニ、家はますますさかんな方だし、出入りするものもおおくなってきたし、いいことだらけだ。

「さらに、そのうえ」という意味を持つ「ノニ」について触れられているという点においては他の研究には無い視点を持っていると言えるが、これらの例文についての分析は、特殊な構造があるようであると述べるにとどまっており、具体的にどのような構造があるのかについては言及されていない。

3. 分析の対象と方法

本節では、用例の収集方法について述べ、「ノニ」文の論理構造について整理する。また「階層化」という概念が他の逆接表現と「ノニ」文との使い分け、および統括的な説明のために特に重要であると考えるので、これらの概念についての本稿における捉え方を示す。

3. 1. 電子化資料による用例の収集

分析にあたり、作例だけでなく電子化資料を利用して事例を多く収集し、より綿密な分析を試みた。具体的にどのような手順で用例を収集したかを以下に示す。

実例収集の対象とした資料は以下の3点である。

- A) 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社版』NEC (1995)
- B) 映画『男はつらいよ』シリーズ シナリオ
- C) 『毎日新聞』のCD-ROM (1991年~1999年)

A) の『新潮文庫』は、CD-ROMについている検索機能で「ノニ」を検索し、1件ずつチェックして接続表現としての「ノニ」のみを抽出した。

B) の『男はつらいよ』シリーズは、日本語教育支援システム研究会（通称 CASTEL-J: Computer Assisted System for TEaching & Learning / Japanese) のCD-ROMに収録されている『男はつらいよ』シリーズの台本（松竹株式会社制作）のテキストデータを用いて、「ノニ」をgrep¹⁾で抽出した。これらのデータも抽出された「ノニ」が接続表現であるかどうかを1件ずつ確認し、対象とならな

いものは手作業で削除することにより、接続表現としての「ノニ」のみを抽出した。

C)の『毎日新聞』はデータが膨大でgrep検索したものを一つ一つ確かめることが困難なため、接続表現以外の「ノニ」が抽出されるのを少しでも避けるために、「のに、」と「のに。」のみをgrep検索した。

このような手順で抽出した結果、A)『新潮文庫』から1075例、B)『男はつらいよ』シリーズから299例の実例が集まった。また、C)『毎日新聞』からは「のに、」が27,276件、「のに。」が1,903の合計29,179例が抽出された。

3. 2. 論理構造

3. 2. 1. 前節および後節の定義

これまでの研究では、「逆接」の説明に「前件/後件」という語が用いられている。「前件/後件」が何を指すのかに特に言及したものはないが、「ノニ」の前に現れる節を「前件」と呼び、「ノニ」の後に現れる節を「後件」と見なしていることは明らかである。そして、「前件」と「後件」の関係を逆接であると解釈している研究が多い(戸村(1988)、前田(1995)他)。

本稿では「前件」が推論の根拠となる「ことがら」であると捉えられるのを避けるために、「ノニ」の前に現れる節を「前節」、後に現れる節を「後節」と呼ぶ。また前節の構成要素は“p”(推論の根拠)、“q”(推論の結果)、およびモダリティ表現であるとする。後節の構成要素は“¬q”(推論に反する結果)とモダリティ表現である。全ての要素が言語化される可能性は低く、特に“q”(推論の結果)は頻繁に非言語化が起きる。

3. 2. 2. 逆接の定義

本稿では、「ノニ」文における逆接とは「前節」と「後節」の関係とするのではなく、“p”(推論の根拠)から導かれた“q”(推論の結果)と“¬q”(推論に反する結果)との関係を指すとする。言い換えれば、前節の一要素である推論の結果と後節の一要素である推論に反する結果の乖離を指すものである。

3. 3. 階層化

3. 3. 1. 条件の階層化

「ノニ」文の分析をする際に、階層化という概念を抜きに考えることはできない。坂原(1985)によると、「条件の階層化」とはある条件があることに対して十分条件であるかどうかを考えるだけでなく、その条件が予期される結果を引き起こしやすいかどうか、すなわち有利な条件か、不利な条件かも考え、ある

結果を導く十分条件が複数ある場合は、それらの条件が強さに応じて階層化されることを言う。

「ノニ」文にはある結果を引き起こす根拠となる条件が必要であり、ある結果を引き起こすのに十分な条件は、通常の場合複数あると考えられる。次の(5)から(8)は「合格する」という事柄に対する十分条件の候補を挙げたものである。

- (5) 先生に絶対合格すると言われた (から、合格するはずだ。)
- (6) 一生懸命勉強した (から、合格するはずだ。)
- (7) 試験前日はよく寝た (から、合格するはずだ。)
- (8) 試験の時間に間に合った (から、合格するはずだ。)

十分条件が複数ある場合には、それらの条件が強さに応じて階層化されている。どの条件が強い条件と認識されるかに関しては、話し手の価値観によって異なるため唯一のものとして示すことは不可能であるが、同じ社会観念を持つ者同士ではある程度似通った傾向を示すことが予想される。

ある条件がある事柄に対して十分な根拠として働くかどうか、すなわち十分条件として機能するかどうかは、相対的な程度の問題と考えられる。一般的には、(5)は(8)よりも十分条件として強いものだととらえられる。また、次のような条件では、ある種特殊な因果関係を信じていない人にとっては非文となることもある。

- (9) 朝御飯にカツを食べた (から、合格するはずだ。)
- (10) 初もうででお守りを買った (から、合格するはずだ。)

さらに、社会的観念が大きく関与していると思われる例としては以下のようなものが挙げられる。

- (11) 中学生なノニ、アルバイトをしている。
- (12) 中学生なノニ、アルバイトをしていない。

中学生がアルバイトをするのが当たり前だと考えられている社会では、(11)のような発話は同意を得るのが難しいであろうし、逆に中学生はアルバイトをしないものだという考えが一般的な社会では(12)の発話は同意を得るのが難しくなるであろう。

「ノニ」文においては、この階層化している条件のうちより強いものが用いら

- (18) 勉強しなかったノニ、合格した。
 [p 勉強しなかった] ノニ、[-q 合格した]

この文では [p 勉強しなかった] という条件から [q 合格しない] を推論したが、実際は予想に反して [-q 合格した] ことを意図している。実際に言語化されなかった部分も論理構造としては以下のように示すことができる。

- (18) 勉強しなかったノニ、合格した。
 [p 勉強しなかった] (ならば [q 合格しない] はずである)
 ノニ、[-q 合格した]

この三要素で「ノニ」文の逆接・譲歩の用法とは、前節に現れる条件 (p) によって導かれる推論の結果 (q) と、後節に現れる推論に反する結果 (-q) との乖離を指す用法であることを明示できる。

4. 2. 条件の階層化

本節では逆接の「ノニ」文における条件 (p) が、条件の階層という概念によってどのように特徴づけられるかを示す。

- (19) 勉強したノニ、不合格だった。
 [p 勉強した] (ならば [q 合格する] はずである)
 ノニ、[-q 不合格だった]
- (19)のように [q 合格する] の根拠となる条件 (p) は、(5)から(8)の例文のように複数挙げることができる。

- (5) 先生に絶対合格すると言われたノニ、不合格だった。
 (6) 一生懸命勉強したノニ、不合格だった。
 (7) 試験前日はよく寝たノニ、不合格だった。
 (8) 試験の時間に間に合ったノニ、不合格だった。

個人差はあるが、各例文の聞き手の受け入れやすさには段階的な違いがある。これは、個人個人である結果 (q) を引き起こす条件 (p) を階層化しているからであると考えると、矛盾が無い。

逆接の「ノニ」の容認度：(8)<(7)<(6)<(5)

結果 (q) を引き起こす条件としての強さ：(8') < (7') < (6') < (5')

逆接の発話意図を表現する際、階層化されている条件 (p) のうち、ある結果 (q) を引き起こしやすい、すなわち強い要素であればあるほど、予想との乖離を強く示すことができるため、逆接の「ノニ」としての容認度は高くなる。この逆接の「ノニ」は「ケド」にできるが、「ケド」に置き換えた場合は、予想との乖離に対する話者の違和感を示す機能を失うため、条件の強さと文の容認度には相関関係がなくなり、(8')のように弱い条件であっても文の容認度は低くならない。

5. 必然を表す「ノニ」文

5. 1. 論理構造

「ノニ」には、(20)のような逆接を表す用法以外にも以下の(21)(22)に見られるような必然を表す「ノニ」の用法がある。

- (20) 子供が1人の時は忙しかったノニ、3人になったら楽になった。
- (21) 子供が1人の時でも忙しかったノニ、3人になったらてんでこ舞いだ。
- (22) 日本語でさえ話し言葉と書き言葉の両方を十分にできる人は少ないノニ、外国語の英語ではなおさら難しい。(『毎日新聞』1996)

これらの文の論理構造は、以下ようになる。

- (20) 子供が1人の時は忙しかったノニ、3人になったら楽になった。
[p 子供が1人の時に忙しかった]
(ならば [q それ以上の人数になったらもっと忙しくなる] はずである)
ノニ、[-q 3人になったら楽になった]

仮に(21)の例文を逆接の論理構造に当てはめると以下ようになる。

- (21) 子供が1人の時でも忙しかったノニ、3人になったらてんでこ舞いだ。
[p 1人の時に忙しかった]
(ならば [q それ以上の人数になったらもっと忙しくなる] はずである)
ノニ、[-q (?) 3人になったらてんでこ舞いだ]

しかし、(21')に見られるように「ノニ」文の後節に当たる [-q] の部分は、

(p) を根拠に予想した推論の結果 (q) から乖離しているとは言えない。むしろ、

- (㉓) 子供が1人の時でも忙しかったノニ、3人になったらてんでこ舞いだ。
 [p 1人の時に忙しかった]
 (ならば [q それ以上の人数になったらもっと忙しくなる] はずである)
 ノニ、[q' (予想通り) 3人になったらてんでこ舞いだ]

のように推論の結果 (q) を根拠とするような、当然の結果 (q') が現れていると考えるのが妥当である。つまり、この用法に逆接の論理構造を当てはめて説明するのは不可能である。必然性を表す「ノニ」文の論理構造は『(p) ノニ (¬q)』という逆接の「ノニ」の論理構造でなく、『(p) ノニ (q')』で表すのが妥当である。この必然性の「ノニ」は、「ノダカラ」に置き換えることができる。

- (㉔) 子供が1人の時でも忙しかったノダカラ、3人になったらてんでこ舞いだ。

5. 2. 条件および結果の階層化

5. 1. で述べたように、必然の「ノニ」は「ある条件 (p) によって導き出された推論の結果 (q) を根拠として、当然の結果 (q') が導き出される」という論理構造を持っている。本節では、その論理構造をさらに詳しく分析する。以下の例文で、推論の根拠となる条件 (p) と、当然の結果 (q') の内容を見ると、各節の中にさらに条件と結果を見いだすことができる。

- (㉕) 子供が2人の時でも忙しかったノニ、5人になったらとんでもなく忙しい。

(p) : 条件<子供が2人> 結果<忙しい>

(q') : 条件<子供が5人> 結果<とんでもなく忙しい>

各節内の条件を (a), (a'), その条件が引き起こす結果を (b), (b') とすると、「前節の関係 (a → b) から後節の関係 (a' → b') が話し手にとって必然的に認められることを示すという論理構造を持つ」と言い換えることができる。このことと条件の階層化との関係を以下に示す。

条件の階層化は、本来同一の結果を導く十分条件に対して生じるものであるが、3. 3. 2. で示したように、条件文においては導かれた結果にも階層化が起きる。

次の例を見ると、<A>の条件は同一の結果 (のうちの一つ) に対し

て階層化していると言える。例えば、「かなり忙しい」という結果に対する条件としては、「子供が2人」よりも「子供が5人」の方が強い条件である。また、ある人が「忙しい」という結果に対して「子供が1人」という条件を提示した場合、話し手が同一人物であれば「とても忙しい」に対してはより強い条件（「子供が4人」など）を提示するのが普通である。

<A>	
強	高
⋮	⋮
子供が6人	とても忙しい
子供が5人	かなり忙しい
子供が4人	忙しい
子供が3人	普通
子供が2人	暇
子供が1人	かなり暇
子供がいない	とても暇
⋮	⋮
弱	低

⑳の文が非文になることから、この考察が妥当であることが分かる。

㉕ 子供が1人でも忙しいノニ、4人だったらとんでもなく忙しいよ。

㉖ *子供が4人でも忙しいノニ、1人だったらとんでもなく忙しいよ。

必然を表す「ノニ」の場合は、ある条件から導かれる結果（bとb'）に階層化が起きているが、その表現の出現には制約がある。それは、条件（aとa'）の間には、（a'）に現れる表現の方が（a）に現れる表現よりも程度が高いものでなければならず、導かれる結果（bとb'）においても、（b'）の方が（b）よりも程度が高くなければならないという点である。

6. 程度の高まりを表す「ノニ」文

必然性を表す「ノニ」文には、「さらに、その上」といったある事柄の程度が高まることを示す用法もある。その用法を「程度の高まりを表す「ノニ」と呼ぶこととし、その論理構造と階層化との関係を明らかにする。

6. 1. 論理構造

程度の高まりを表す「ノニ」文は、必然性を表す「ノニ」文と論理構造は同じである。よって、論理構造は「(p)ノニ(q')」で表される。

- (27) 雨に降られただけで災難だったノニ、転んでけがをしまして最悪だ。

[p 雨に降られただけで災難だった]

ノニ、[-q 転んでけがをしまして最悪だ]

6. 2. 結果の階層化

程度の高まりを表す「ノニ」文は、前節(a→b)という関係に、後節でもう一つ条件(a')を加えることにより、結果(b)の程度がさらに高まることを表している。条件(a)(a')はいずれも結果(b)を引き起こす要因として十分条件になりえなければならないが、前節の条件(a)と後節の条件(a')に条件の階層化における程度差は要求されない。しかし、後節の条件(a')は結果(b)の程度を高めるのに十分な要因とならなければならないという制約がある。

- (28) 自分が赤い毛をしているのだけでもたまらないノニ、腹心の友までそうだったら、がまんできないわ。(『赤毛のアン』p.182)

上の文は、後節の条件(a')が前節の条件(a)よりも程度が高いものが来ている例であるが、以下の文は後節の条件(a')が前節の条件(a)より程度が高くなっているとは言えない例である。

- (29) 入試の勉強でほとんど寝られなかったノニ、まだレポートが2本ある。

この例文では、前節の条件(a=入試の勉強)と後節の条件(a'=レポートが2本)を比較した場合、条件の階層化で考えれば、ある結果(b=ほとんど寝られない)を引き起こす要因としては、後者の方が前者に比べて程度が低いと考えるのが一般的である。それにもかかわらずこの「ノニ」文が程度の高まりを表す「ノニ」として非文とならないのは、入試の勉強で睡眠不足であるという状況が緩和されることなく、入試の勉強の上にレポートを2本抱えていることでその度合いがさらに高まるということが想像されるからである。

しかし、(30)のように「災難である」という度合いが低くなるような条件が(a')に来る場合、「ノニ」は非文となるが、「ケド」に置き換えた場合(例文(30))には非文とならない。

- (30) * 転んだのは災難だったノニ、大したけがはなかった。
 (31) 転んだのは災難だったケド、大したけがはなかった。

これは、「ケド」を用いた場合には、程度の高まりを表すことは不可能であり、その逆に程度の緩和を表すことになると考えれば矛盾なく説明できる。

7. 「ノニ」文の各用法のまとめ

7. 1. 「ノニ」文と条件・結果の階層化

「ノニ」の3つの用法、すなわち①逆接の「ノニ」、②必然の「ノニ」、③程度の高まりを表す「ノニ」の各用法と条件・結果の階層化は以下のようにまとめられる。

7. 1. 1. 逆接の「ノニ」

ある結果（q）を引き起こす根拠となる条件（p）には条件の階層化があり、十分条件として強く働けば働くほど、推論に反する結果（ $\neg q$ ）との乖離に対する違和感を強く表すことができる。根拠となる条件は相対的なものであり、話し手が持つ文化的背景や価値観などにより、ある特定の条件がある結果を招く根拠としてどの程度機能するかは異なる。以下にp 0として表されるような推論の根拠になりえない無関係なもの、客観的事実のみを述べる際にはノニを用いることができない。逆接の「ノニ」文はある結果（q）を引き起こすのに十分な条件（p）がありながらその結果が起きなかった場合（ $\neg q$ ）に用いられる。

（十分条件としての程度）

高

：

p 4

p 3

p 2

→ q ノニ $\neg q$

p 1

* p 0 （*もうすぐ夏休みなノニ、今日は学校へ行く。）

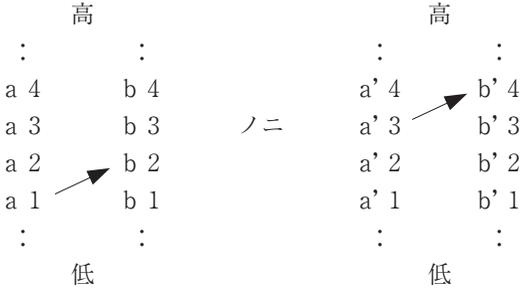
：

低

7. 1. 2. 必然を表す「ノニ」

必然性を表す「ノニ」は、前節の関係 ($a \rightarrow b$) を根拠に後節の関係 ($a' \rightarrow b'$) が必然的に成立することを示すもので、ある条件 (a) とそれが導いた結果 (b) の両方に条件の階層化の制約がある。前節の要素 (a, b) よりも後節の要素 (a', b') の方が程度が高くなければならない。

(a : 要因として強く働くか否かの度合い / b : 出来事の程度)



7. 1. 3. 程度の高まりを表す「ノニ」

程度の高まりを表す「ノニ」は、前節で起きた結果が、後節においてさらにその程度が高くなる用法である。必然の「ノニ」と程度の高まりを表す「ノニ」の最も大きな違いは、前節の条件 (a) と後節の条件 (a') が重なって作用するか、別の状況として捕えられているかの違いである。必然の「ノニ」は前節の関係 (条件 a → 結果 b) と後節の関係 (条件 a' → 結果 b') は別々に作用するものと考えられる。一方の程度の高まりを表す「ノニ」は、前節の関係 (条件 a → 結果 b) に後節の条件 (a') が追加されることで b という結果の程度がさらに高くなっている。

<必然の「ノニ」>

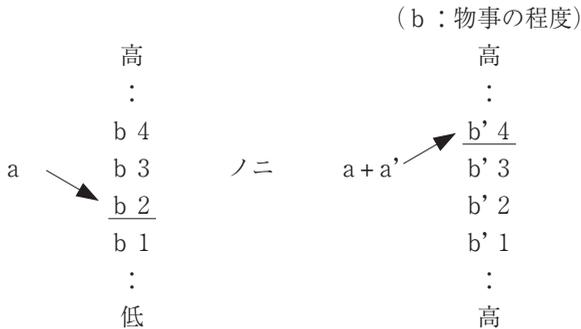
- ② 2人で住んでもかなり狭いノニ、事務所にしたら恐ろしく狭いよ。
 (「2人で住むこと」と「事務所にすること」は「狭さ」に対して別々に作用)

<程度の高まりを表す「ノニ」>

- ③ 交通事故に遭っただけでも大変なノニ、病気になって入院までした。
 (「交通事故に遭うこと」と「病気になって入院」は「大変さ」に対して重なって作用)

もう一つの相違点は、条件および結果の階層化の有無である。5. 2. で述べたように必然の「ノニ」には条件（ a および a' ）と結果（ b および b' ）の両方に階層化の制約があり、どちらも、前節（ a, b ）よりも後節（ a', b' ）の方が程度が高いことが求められる。一方、程度の高まりを表す「ノニ」は結果（ b および b' ）には程度の差が求められているが、条件（ a および a' ）の階層化に制約はなく、後節には結果の程度が高まる十分条件の追加が求められているに留まる。

程度の高まりを表す「ノニ」は、ある結果（ b ）を導く十分条件（ a ）がありながら、その状況にさらに結果の程度を高めるような別の十分条件（ a' ）が生じることを示す。結果には階層化の制約があり、後節の結果（ b' ）は前節の結果（ b ）よりも程度が高いものでなければならない。条件（ a ）に階層化の制約はないが、結果（ b ）の程度が低くなるようなものは後節に来ることができない。



8. 各用法の連続性

最後に、「ノニ」文の各用法の連続性を示す。最も中心的な用法²⁾であると考えられるのは逆接・譲歩の用法である。この用法は全て「ケド」で置き換えが可能である。

(34) 一生懸命勉強したノニ、合格しなかった。

[p] ノニ [-q]

またこの用法に判断や評価が加わった場合 (35) も、その判断や評価は逆接の論理構造全体にかかり、逆接の「ノニ」として解釈することができる。³⁾

- (37) 誕生日を覚えていてくれただけで嬉しいのに、プレゼントをくれるなんて感激だ。
 (37') <推論との乖離がある解釈>
誕生日を覚えていてくれただけで嬉しいのに、プレゼントをくれるなんて感激だ。

$$\begin{array}{ccc} p & & -q \\ \{[p] \text{ ノニ } [-q]\} & & \text{なんて感激だ} \end{array}$$

- (37'') <推論との乖離がない解釈>
誕生日を覚えていてくれただけで嬉しいのに、プレゼントをくれるなんて感激だ。

$$\begin{array}{ccc} [p : a & & b] & & [q' : a' & & b'] \\ \{[p : a \rightarrow b] \text{ ノニ } [q' : a' \rightarrow b']\} \end{array}$$

なお、この用法においては、前節の条件（a）と後節の条件（a'）は別々の出来事として起きており、同時には起こりえないものである（38）。

- (38) 研究室としてもかなり狭いノニ、教室にしたらどんでもなく狭いよ。

$$\begin{array}{ccc} [p : a & & b] & & [q' : a' & & b'] \\ \{[p : a \rightarrow b] \text{ ノニ } [q' : a' \rightarrow b']\} \end{array}$$

この必然性の用法において、前節の条件（a）に後節の条件（a'）が重層的に作用した場合に、程度の高まりを表す「ノニ」文の用法となる（39）。

- (39) 雨に降られただけで災難だったノニ、転んでけがをしまして最悪だ。

$$\begin{array}{ccc} [p : a & & b] & & [q : +a' & & b'] \\ \{[p : a \rightarrow b] \text{ ノニ } [q : +a' \rightarrow b']\} \end{array}$$

この用法においても、述語が省略される場合がある。

- (40) 入試の勉強でほとんど寝られなかったノニ、まだレポートが2本ある。

$$\begin{array}{ccc} [p : a & & b] & & [q' : +a' & & (b')] \end{array}$$

中心的な逆接・譲歩の用法と周辺的な用法との関連性を示すと以下のようなる。

<明らかに推論との乖離あり>

前節の推論に反する結果が後節に現れる文：逆接・譲歩の用法

↓

<推論との乖離については両方の解釈が可能>

判断や評価の表現が加わり、その表現が文全体に作用すると解釈できる場合と、推論との乖離を表す部分のみに作用すると解釈できる場合の両方がある：
中間的用法

↓

<明らかに推論との乖離無し>

前節の関係から、後節の結果を必然的に推論する文：必然性を表す用法

↓

前節の条件に後節の条件が重ねて作用し、前節の結果が強まったことを表す文：程度の高まりを表す用法

本稿では条件および結果の階層化、論理構造という2つの分析の視点によって、「ノニ」文の様々な用法を網羅的に説明することができた。今後、他の接続表現にもこの視点を取り入れて分析を試みる。

<注>

- 1) **grep**: UNIXのコマンドの一つ。指定されたパターン（文字列）を含む行を抽出する。
- 2) ここで言う「中心的な用法」とは、筆者が集めたデータを見るかぎり、その出現数が圧倒的に多いと言う意味である。
- 3) 述語が省略されている場合も、逆接・譲歩の用法であることには変わりがない。
 - (i) 楽しみだったノニ、残念だったね。

p

{[p] ノニ ([-q])} ノハ残念

<参考文献>

- 家田章子 (1997) 「「ノニ」の論理構造—自然論理による考察—」 修士論文, 名古屋大学
- オ田いずみ (1980) 「「のに」と「ても」」 『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』 3 : 37-47.

- 小泉 保 (1987) 「譲歩文について」『言語研究』91: 1-14.
- 坂原茂 (1985) 『日常言語の推論』東京: 東京大学出版会.
- 田野村忠温 (1989) 「不適条件表現に関する覚書」『奈良大学紀要』17:164-176.
- 戸村佳代 (1988) 「日本語における二つのタイプの譲歩文 — 「ノニ」と「テモ」 —」『文芸言語研究 言語篇』15: 123-133.
- 前田直子 (1995) 「ケレドモ・ガとノニとテモ — 逆接を表す接続形式 —」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』: 496-505. 東京: くろしお出版.
- 渡部学 (1995) 「ケド類とノニ — 逆接の接続助詞 —」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』: 557-564. 東京: くろしお出版.